古道をたずねて ㉟

卯月の空は花ぐもり
若草燃ゆる最上川
黒滝越えて天神渕
三崖滝にお八天
男度胸でどんと行け
碁点・隼・三ケの瀬越えて
清川東風に帆をあげりゃ
舟は帆まかせ帆は風まかせ
今夜はおばこの腕まかせ
どんと漕ぎだせ土根性

水の古道 母なる川最上川②
五百川峡の掘削

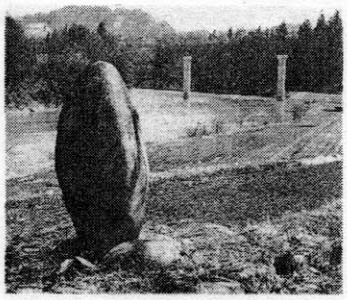
五百川峡谷三〇キロの流れは、最上川の長流の中でも難所であった。

まず、この「五百川」の地名の由来を考えてみよう。両岸から迫る断崖絶壁の谷間に、数多くの小川が流れこむ。上流から実渕川、大舟木川をはじめ、皆朱沢、朝日川、前田沢川、送橋川、大谷川、川通川などの小河川がそれである。五百川とは、数多くの小川が流れる所、の意味である。

しかし一説には、その昔五百川氏が居城し、この付近一帯を治めたとの説もあるが、これは伝説と考える。

さて、本論に入るが、最上川の舟運が盛んになったのは、江戸時代の中期、元禄時代以後である。それ以前は、上杉、最上、酒井の各藩では、それぞれ小規模の舟運をやっていたが、なにせ、いたる所の岩盤、激流には手を焼いていた。その上、毎年繰り返す洪水である。

この時「それでは私共に、この川の改修工事をおまかせ下さい」と願い出た者があった。それは上杉藩の御用商人、大阪の西村久左ヱ門と同成政の兄弟であった。これは、今から約三百年前の元禄五年六月十日のことである。西村兄弟は当時、京都を拠点として、全国に舟運業を持つ大商人であった。兄弟はポンと一万七千両の大金を投じて、突貫工事を進めた。さしもの最上川一帯の大掘削工事も、元禄七年九月、見事に完成した。この金は今の金に換算すると、約二億五千万円くらいだという。


八天稲荷大明神の石神と最上川

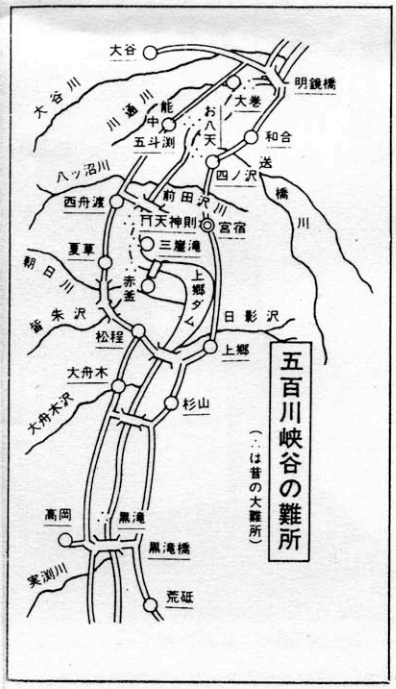
白鷹町史「松川御普請伝」の中に「菖蒲に黒滝と申して、数丈の滝にて、時として鳴音雷の如し」とある。

お八天もまた、激流中の激流であった。前朝日町助役・故鈴木茂雄さんは生前、次のように語ってくれた。

「今から三百年程の昔、米沢藩の藩米を満載した下り舟が、お八天の渦に巻きこまれた。舟方衆は青くなって、なす術も知らない。この時一人の舟方が『これ水神の祟りならん。われ川底にもぐり、水神の霊を慰めん』と、ザブンと水にもぐって、水神を拾い上げた」と。この神は今、お八天の川辺に、石神として建っている。

また、和合住在の木村定雄さん(八〇歳)は語る。「明鏡橋の下、数百メートルにわたって岩を切り開いたためがねの跡がある。あの付近は昔、浅瀬のため舟運に不便、故に西村久左ヱ門が切り開いたものですよ…」と。

(昭和六十二年四月号)



『ふるさと　朝日町散歩』長岡幸助編より抜粋（昭和62年の記事）